

# 日本横断を終えて

谷口喜勝

私が探検部に入部後のこの苦しい3ヶ月間は、例えば、保津川における激流下りのトレーニング、沢登りの練習、外苑でのボッカ、宇治川におけるファルトボートの練習、これらすべてが、この日本横断計画のためにあった。特に、ファルトボートに関して言えば、先輩諸氏数人が、琵琶湖一周を経験したにすぎず、川を遡ることにおいては、全員がまったく未経験なことであった。また、宇治川での練習では、まったくスピードがでず、いかに川を遡ることが困難なことであるか、いかに体力的にも精神的にも持久性が必要であるか、「日頃、頭の回転の鈍い」と言われている私にでさえも、それが理解できた。

私は、この計画に不安の念を、一層深めた。なぜならば、宇治川とは比較にならぬ程、富士川の流れは速く、日本三大急流の一つに数えられる程である。

実際、私はその不安を抱きながら、合宿にはいった。

連日の雨のために、水は濁り、ゴーゴーと無気味な音を立てて流れていた。全員、呆然とその光景を見ているだけであった。しかし、我々には後退することは許されなかった。(もし、後退すると太平洋へと出てしまうからである。これもその一つの理由ではなかっただろうか。)一寸でも、前進することが、我々に残された唯一の解決策であった。

我々の一途な願いが天に通じたのか、それとも、我々の努力の結果なのか、日数を重ねるごとに、ほぼ予定通りに、ファルトボートは、上流へと向かって進んでいった。

しかし、その間、我々はあらゆる難関を突破してきたのであった。そして、私ももちろんその例外ではなかった。

私は、合宿に入って5日目頃から、肩に痛みを感じるようになった。これは毎日のボッカで不良なジョイコを背負い過ぎたに違いなかった。地獄の苦しみとは、こういうものかと思ったりもした。

ところが、その痛みがパドルを漕ぐ時にまで出て来た時には、一瞬、目の前が真暗になってしまい、この先、この長い合宿に耐えていけるのか心配だった。

しかし、合宿が終った今、そんな痛みなんか全然。気にならない。成功したからかもしれないが、痛みを堪えて、無理につかったからに違いない。理屈には合わないが、これも若いからだろう。

話は変な方にそれてしまったが、最後に私はこの合宿のために、今まで練習をしてきた。また、練習したからこそ、私のような微力な人間も先輩達に何とかついていけた。しかし、そこには、まだ甘さがあったように思えるが、今はそれでもよいのではないのか。一年生の間に、できるだけ先輩達の技術を身につけるために、ただそれについて行けばよいのではないのか。こう言うと、ちょっと語弊があるが、先輩は私の「栄養」である。また、先輩もそう願っているに違いないと、私は確信したい。また、私が今後大きく成長していくためには、そうでなければならない。しかし、そこには先輩と後輩との間は、目に見えない鎖で繋がれていなければならない。そのことを忘れてしまってはいけない。そして、この関係があってこそ初めて成り立つことである。

私は、この計画のメンバーの一人として参加できたことを誇りに思う。